現代文

レクチャー1	評論①（新聞社説）	CD1	1–7	2
レクチャー2	評論②（人間・社会論）	CD1	8–17	8
レクチャー3	評論③（言語・文化論）	CD2	1–8	14
レクチャー4	評論④（文学・芸術論）	CD2	9–15	18
レクチャー5	評論⑤（学問・科学論）	CD3	1–7	22
レクチャー6	随想①（新聞のコラム）	CD3	8–17	26
レクチャー7	随想②（個人の感慨）	CD4	1–7	32
レクチャー8	小説①（登場人物の心情の把握）	CD4	8–16	36
レクチャー9	小説②（情景の理解）	CD5	1–6	42
レクチャー10	小説③（会話の意味の把握）	CD5	7–12	46
レクチャー11	詩	CD6	1–9	50
レクチャー12	短歌・俳句	CD6	10–15	54
レクチャー13	口語文法	CD7	1–9	58
レクチャー14	融合文	CD7	10–15	62

古文

レクチャー15	物語①（説話物語）	CD8	1–9	68
レクチャー16	物語②（歌物語）	CD8	10–19	74
レクチャー17	物語③（伝奇物語）	CD9	1–10	80
レクチャー18	物語④（作り物語）	CD9	11–19	86
レクチャー19	物語⑤（軍記物語）	CD10	1–9	90
レクチャー20	物語⑥（歴史物語）	CD10	10–18	94
レクチャー21	日記①	CD11	1–7	100
レクチャー22	日記②	CD11	8–15	104
レクチャー23	随筆①	CD12	1–7	108
レクチャー24	随筆②	CD12	8–14	114
レクチャー25	随筆③	CD13	1–7	120
レクチャー26	評論①（物語論）	CD13	8–15	124
レクチャー27	評論②（歌〈俳〉論）	CD14	1–7	128
レクチャー28	和歌（三大歌集）	CD14	8–15	132
レクチャー29	俳諧（三大俳人）	CD15	1–7	136
レクチャー30	俳文	CD15	8–14	140
レクチャー31	近世小説①	CD16	1–5	146
レクチャー32	近世小説②	CD16	6–13	150

漢文

レクチャー33	故事	CD17	1–6	154
レクチャー34	文章	CD17	7–14	158
レクチャー35	史伝①	CD18	1–3	164
レクチャー36	史伝②	CD18	4–10	168
レクチャー37	思想①	CD19	1–8	172
レクチャー38	思想②	CD19	9–12	178
レクチャー39	詩①（絶句）	CD20	1–4	184
レクチャー40	詩②（律詩）	CD20	5–15	188

レクチャー15

古文　物語①（説話物語）

CD 8
1-9

このレクチャーの学習目標

❶できごとの経過を追って、話のすじをとらえる。
❷基本的な古語の意味をとらえる。とくに、古文の解釈において注意すべき単語に「古今異義語」というものがあることを知り、今後の単語学習のポイントをつかむ。
❸指示内容のつかみ方、およびその説明のしかたになれる。
❹説話物語の特色を知り、その説話を収録した編者の意図をつかむ。

問題　塞翁が馬（十訓抄・第六―三十一話）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、唐土に*塞翁といふものあり。賢くつよき馬を持ちたり。これを人にも貸し我も使ひつつ、世を渡る便りとしけるほどに、この馬、いかがしたりけむ、いづちともなく失せにけり。聞きわたる人、いかばかり嘆くらむとてとぶらひければ、「㋐」とばかり言ひてつゆも嘆かざりけり。(1)あやしと思ふほどに、この馬、同じさまなる馬を多く率て来にけり。いと(2)ありがたき事なれば、したしき(3)うとき喜びを言ふ。かかれどもまた「㋑」と言ひて、これをも驚くけしきなくて、この馬あまたを飼ひてさまざまに使ふ間に、翁の子今出で来たる馬に乗りて落ちて、右の肘を突き折りにけり。聞く人、目を驚かしてとぶらふにも、なほ「㋒」と言ひてけしきも変はらず、(4)つれなく同じさまにいらへて過ぎけるに、その頃にはかに国にいくさ起こりて、兵を集められけるに、国中さもある者残りなく出でて皆死ぬ。この翁の子かたはなるによりて漏れにければ、片手は折れたれども命は全かりけり。(5)これ、賢きためしに申し伝へたり。今も(6)よき人は毎事に動きなく心軽からぬは、この翁が心に通へるなりとぞ見ゆる。*内外典に教ふるところ、皆人の心を持つべき様なり。昔よりよき名をも立て、悪しきためしにも言はるる、ただ心一つのいたすところなり。*かの新豊の老人が雲南の軍を逃れたりけるは、みづから臂を折りける故なり。(7)これは自然の事なり。いとありがたかりし事なり。

（注）
*塞翁＝とりで近くに住んでいた老人で、名を北叟という。
*内外典＝仏教の教典を「内典」、仏教以外の主として儒教の書を「外典」という。
*かの新豊の老人＝白楽天の、新楽府「新豊折臂翁」に歌われている老人。二十四歳の時、みずから腕を折って兵役をのがれ、戦乱の世を生きのびた八十八歳の老人。新豊は首都長安の東にある県の名。

語注

2 **便り**　よりどころ。
2 **いかがしたりけむ**　どうしたのであろうか。挿入句で、次にくる句の説明になっている。
4 **とぶらふ**　見舞う。
4 **つゆ…打消語**　すこしも…ない。
11 **さもある者**　兵士として役立つ者。
13 **ためし**　例。
15 **よき名**　よい評判。名声。

■絶対暗記事項

○中世の説話物語
- 世俗説話
  - 宇治拾遺物語
  - 十訓抄
  - 古今著聞集
- 仏教説話
  - 宝物集
  - 発心集
  - 撰集抄
  - 沙石集

設問

4

一 〈話の筋の把握〉 文中の空欄㋐・㋑・㋒に、「喜ばず」「悔いず」のいずれかを入れて、文意が通るようにせよ。

㋐（　　）　㋑（　　）　㋒（　　）

5

二 〈内容探求〉 傍線部(1)は、だれが、どのような事実について、どのように思っているのか。

（　　）

6

三 〈語句の意味〉 傍線部(2)・(3)・(4)・(6)の各語の意味について、左にあげたそれぞれの(ア)～(エ)の中から最も適切なものを一つずつ選び、記号を記せ。

(2) ありがたし
(ア) めったにない　(イ) すぐれている
(ウ) かたじけない　(エ) きわめて尊い

(3) うとし
(ア) 冷淡だ　(イ) よく知らない
(ウ) 親しくない　(エ) はっきりしない

(4) つれなし
(ア) 無情である　(イ) 気にとめない
(ウ) そっけない　(エ) 前のように

(6) よき人
(ア) 親切な人　(イ) 富裕な人
(ウ) 難をのがれた人　(エ) 賢明な人

（　　）（　　）（　　）（　　）

7

四 〈内容探求〉 傍線部(5)の「これ」はどういうことをさしているか。三十字以内で、簡潔に述べよ。

8

五 〈口語訳〉 傍線部(7)を、「これ」のさすもの、「自然の事」とは、自然にどうなったことを意味するのかを明らかにしつつ、口語訳せよ。

（　　）

設問のチェックポイント

三 **古今異義語** 「ありがたし」は「あることを望んでもむずかしい」が原義で、「めったにない・珍しい・すばらしい」の意。「うとし」は漢字で書けば「疎し」。「親―疎」で対立する。「つれなし」は「冷淡だ」の意にも用いるが、「平然とそしらぬふりをする・変化しない」の意に注意。「よき人」は「身分・教養の高い人」の意が普通だが、「よし」は要するに「すぐれている」の意で、種々の場合に用いられる。

五 **老荘の思想** 同様なよい結果を得ても、「自然無為」によって得た場合は、「作為」によって得た場合よりすばらしいとする考え方である。

例題1　四の宮河原の地蔵（宇治拾遺物語・巻五の一）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これも今は昔、山科の道づらに、四の宮川原といふ所にて、袖*くらべといふ、あき人あつまる所あり。その辺の下種のありける、地蔵菩薩を一体造りたてまつりたりけるを、*開眼もせで櫃にうちいれて、奥のへやなどおぼしき所に納め置きて、世のいとなみにまぎれて、程へにければ、忘れにける程に、三四年ばかりすぎにけり。ある夜、夢に、(1)大路をすぐる者の、声だかに人よぶ声のしければ、「(2)何事ぞ。」ときけば、「(3)地蔵こそ。」と、高くこの家の前にていふなれば、おくのかたより、「(4)何事ぞ。」と、いらふる声すなり。「(5)明日、天帝*釈の地蔵会し給ふには、参らせ給はぬか。」といへば、この小家のうちより、「参らんと思へど、まだ目のあかねば、え参るまじく。」といへば、「(6)かまへて参り給へ。」といへば、「目も見えねば、いかでか参らん。」といふ声すなり。(7)うちおどろきて、なにのかくは夢にみえつるにかと思ひ参らするに、あやしくて、夜あけて、おくのかたをよくよく見れば、この地蔵納めて置きたてまつりたりけるを思ひいだして、見いだしたりけり。これがみえ給ふにこそと、おどろき思ひて、いそぎ開眼したてまつりけりとなん。

（長崎大）

*袖くらべ＝「袖の下で指を握りあってする取引の一種」といわれ、他にも諸説がある。
*開眼＝仏像が完成したときに行う儀式。ただの木石である像に魂を入れること。
*天帝釈＝仏法を守護する神。十二天の一つで、東方の守護神。　*地蔵会＝地蔵菩薩のために行う法会。

問一　傍線部(1)「大路をすぐる者の」以下の文章は、夢の中の描写であるが、その描写はどこで終わっているか。次の中から選び、記号で答えよ。

(ア)　声のしければ　　(イ)　いらふる声すなり
(ウ)　いふ声すなり　　(エ)　見いだしたりけり

〔　　〕

問二　傍線部(2)(3)(4)(5)は、それぞれだれのことば（または、心中に思ったこと）か。左にあげるものの中から選び、記号で答えよ。

(ア)　大路をすぐる者　　(イ)　あき人　　(ウ)　その辺の下種
(エ)　地蔵菩薩　　(オ)　天帝釈

(2)〔　　〕　(3)〔　　〕　(4)〔　　〕　(5)〔　　〕

問三　傍線部(6)(7)を口語訳せよ。

(6)〔　　〕　(7)〔　　〕

問四　二重傍線部(A)の「こそ」と同じ用法の「こそ」を、次から記号で選べ。

(ア)　梅が花、散らずありこそ、思ふ子がため
(イ)　鳶のゐたらんは、何かはくるしかるべき。此の殿の御心さばかりにこそ。
(ウ)　中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。
(エ)　北殿こそ、聞き給ふや、など言ひかはすも聞こゆ。

〔　　〕

〈ヒント〉

問一　「うちおどろきて」は、はっと目がさめて、の意。そこに着目。また、「いふなれば」「すなり」という推定の助動詞から、家の外と内とのやりとりを主人公が聞いているという夢の中の場面を理解する。

問二　(2)は「何事だろう」と不審に思う人。(3)は「…と、高くこの家の前にていふ」から考える。(4)は「おくのかたより」に着目。(5)は地蔵菩薩を誘うことば。

問三　(6)「かまへて」は必ず、の意。

問四　(A)の「こそ」は呼びかけるとき、親愛の情を表す接尾語（間投助詞とする説もある）

問五　問題文の主旨として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

(ア)　開眼することを忘れ、放置された地蔵菩薩の像が夢の中にあらわれて語り、さとしたありがたさ。

(イ)　開眼することを忘れ、放置された地蔵菩薩の像が夢の中でその製作者にうらみをこめてうったえた恐ろしさ。

(ウ)　開眼することを忘れ、放置された地蔵菩薩の像が夢の中で仲間の地蔵と大声を出して争ったきみわるさ。

(エ)　開眼することを忘れ、放置された地蔵菩薩の像が夢の中で仲間の地蔵とはかって、その製作者をだましたこっけいさ。

〔　　〕

問五　各選択肢の文末に注意する。

例題2　刑部卿敦兼と美貌の妻（古今著聞集・巻八の十）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

刑部卿敦兼はみめのよににくさげなる人なりけり。その北の方は、はなやかなる人なりけるが、五節を見はべりけるに、とりどりにはなやかなる人々のあるをみるにつけても、まづわがをとこのわろさ心うくおぼえけり。家に帰りて、すべて物をだに(1)いはず、目をも見あはせず、(2)うちそばむきてあれば、しばしは何事のいできたるぞやと心もえず(3)思ひゐたるに、しだいに(4)いとひまさりてかたはらいたきほどなり。さきざきの様に一所にもゐず、方をかへて住みはべりけり。ある日刑部卿出仕して、夜に入りて帰りたりけるに、出居に火をだにも(5)ともさず、装束はぬぎたれども、たたむ人もなかりけり。女房どもも、みな御前のまびき*にしたがひて、さしいづる人もなかりければ、せん方なくて、車よせの妻戸をおしあけて、ひとり(6)ながめゐたるに、更*たけ夜しづかにて、月の光風の音、物ごとに身にしみわたりて、人のうらめしさもとりそへておぼえけるままに、心をすまして篳篥をとりいでて、時のねにとりすまして、

籬のうちなるしら菊（A）も　うつろふみるこそあはれなれ　我らがかよひてみし人も　かくしつつこそかれにしか

と、くり返しうたひけるを、北の方ききて、心はやなほりにけり。それよりことになからひめでたくなりにけるとかや。優なる北の方の心なるべし。（B）（C）（D）

（大阪市大）

＊まびき＝まくばせ。
＊更＝日没から日の出までを五分して、初更・二更などとよぶ時の称。

問一　傍線部(1)(2)(3)(5)(6)の主語はそれぞれだれか。次から選び、記号で答えよ。

(ア)敦兼　(イ)北の方　(ウ)五節　(エ)女房　(オ)御前　(カ)この文章の筆者

(1)〔　　〕　(2)〔　　〕　(3)〔　　〕　(5)〔　　〕　(6)〔　　〕

問二　傍線部(4)を口語訳せよ。

〔　　〕

問三　二重傍線部A～Dの「なり」（または「なる」）を、文法的相違がはっきりわかるように説明せよ。

A〔　　〕
B〔　　〕
C〔　　〕
D〔　　〕

〈ヒント〉

問一　(5)火をともしたり、装束をたたむのは北の方のすることか、女房どものすることか。

問二　「かたはらいたし」に注意。

問三　所在・断定を表す助動詞と動詞と形容動詞の語尾の識別。

例題3　右近少将義孝の成仏（今昔物語集・巻二十四の第三十九）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、右近少将藤原義孝といふ人有りけり。これは一条摂政殿の御子なり。(1)形・有様より始めて、(2)心ばへ・身の(3)才、皆人に勝れてなむ有りける。また、(4)道心なむ深かりけるに、いと若くして失せにければ、親しき人々歎き悲しみけれども、かひなくて止みにけり。

しかるに、失せて後十月ばかりを経て、賀縁といふ僧の夢に、少将いみじく心地よげにて、笛を吹くと見る程に、ただ口を鳴らすになむ有りける。賀縁これを見ていはく、「母のかくばかり恋ひ給ふを、いかにかく心地よげにてはおはするぞ」といひければ、少将答ふる事はなくして、かくなむ読みける、

しぐれにはちぐさの花ぞ（　　）
(5)なにふるさとの袖ぬらすらむ

と。賀縁覚め驚きて後、泣きける。（東海大・政経）

問一　傍線部(1)の意味として正しいものを次から選び、記号で答えよ。

(ア)体形　(イ)容姿　(ウ)背丈　(エ)色合い　(オ)形式

（　　）

問二　傍線部(2)の意味として正しいものを次から選び、記号で答えよ。

(ア)心づかい　(イ)気持ち　(ウ)爽快さ　(エ)晴れやかさ　(オ)気だて

（　　）

問三　傍線部(3)の意味として正しいものを次から選び、記号で答えよ。

(ア)才能　(イ)年齢　(ウ)知能　(エ)学問　(オ)機知

（　　）

問四　傍線部(4)の口語訳として正しいものを次から選び、記号で答えよ。

(ア)求道の心ばかりが深かったのに
(イ)仏の道はどこまでも深いのだから
(ウ)道を求めて深いところまで行ってしまったが
(エ)仏道に帰依する心だけが深かったのに
(オ)仏道に帰依する心が深かったが

（　　）

問五　（　　）に入れるべき語を次から選び、記号で答えよ。

(ア)ちりまがひ　(イ)ちりまがへ　(ウ)ちりまがふ
(エ)ちりまがふる　(オ)ちりまがふれ

（　　）

問六　傍線部(5)の品詞は何か。次から選び、記号で答えよ。

(ア)感動詞　(イ)代名詞　(ウ)名詞
(エ)助詞　(オ)副詞

（　　）

〈ヒント〉

問一　「形」は、身体の形態を指すわけではない。

問二　「心ばへ」は、相手に対する気配りをいう。

問三　「才」は、漢文を読み書きする能力をいう。

問四　「ける」が過去の助動詞であり、「に」が逆接の接続助詞であることに留意して選択する。

問五　直前に「ぞ」があることを見落としてはならない。

問六　「なに」は、ここでは『どうして』という意味である。

例題④　和歌で罪を許された郡司（古本説話集・巻上の第四十四）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、大隅の*(1)かみの、国の政、したため行ふあひだに、郡の司のしどけなきことどもありければ、「召しにやりて、いましめむ」といひて、人遣りつ。「さきざき、かくしどけなきことある折は、罪に任せて、重く軽くいましむることあり。それ一度にあらず。たびたび累なりたることなれば、これもいましめむ」とて、召すなりけり。

さて、「ここに召してさふらふ」と申しければ、さきざきするやうに、そへ臥せて、尻頭*にのぼるべき人、笞*を切りまうけて打つべき人などまうけてあるに、人二人して引き張りて(2)ゐて来たるを見れば、頭は黒き髪も交らずいみじう白う、みるに、打たせむことのいとほしうおぼえければ、「何事にことをつけて、これを許さむ」と思ふに、ことつくべき事もなし。過ちどもを片端より問ふに、ただ老をのみ高家にていらへをり。「いかにしてこれ許してむ」と思ひて、「(3)おれはいみじき盗人かな。さはありとも、歌は詠みてむや」といふに、「はかばかしくはあらずとも、つかまつりてむ」といふ。「いで、さは詠め」といへば、程もなく、わななかして、うち出だす。

年を経てかしらに雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えに（　　）

と詠みたりければ、かみいみじう感じ、あはれがりて、許してやりてけり。（青山学院大・経営）

*大隅＝旧国名。
*尻頭にのぼるべき人＝尻をおさえる人と頭をおさえる人。
*笞＝しもと。刑具のむち。

問一　傍線部(1)「かみ」、(2)「ゐ」に相当する漢字を、それぞれ次から選び、記号で答えよ。

(1)　(ア)神　(イ)伯　(ウ)上　(エ)頭　(オ)守　(カ)督　〔　　〕

(2)　(ア)率　(イ)射　(ウ)居　(エ)以　(オ)為　(カ)依　〔　　〕

問二　傍線部(3)の意味として適当なものを、次から選び、記号で答えよ。

(ア)私も実はたいへんな盗みをしたことがある。
(イ)私は人の心を盗みとることができるのだ。
(ウ)おまえはたいした盗賊のかしらだな。
(エ)おまえは全くしようのないやつだな。
(オ)おまえはたいへんな盗みの罪を負っているぞ。

〔　　〕

問三　（　　）に入れるのに適当な語を、次から選び、記号で答えよ。

(ア)けり　(イ)ける　(ウ)けれ　(エ)けむ　(オ)けめ

〔　　〕

問四　「年を経て……」の歌の第四句の「しもと」は掛詞になっているが、どれとどれが掛けられているか。次から選び、記号で答えよ。

(ア)「下と」と「笞」　(イ)「死もと」と「笞」
(ウ)「霜と」と「笞」　(エ)「下と」と「霜と」
(オ)「下と」と「死もと」　(カ)「霜と」と「死もと」

〔　　〕

〈ヒント〉

問一　(1)「国のかみ」は、「こくしゅ」とも呼ばれる。また、(2)は『連れ』という意味である。

問二　「郡の司」は地方の有力者であって、泥棒ではない。

問三　「ぞ」の結びは、もちろん連体形である。

問四　「雪」や「身は冷え」が手がかりである。